



目の相談室より No.11

ご存知ですか?③

特定疾患に対する医療給付のご紹介

1 厚生労働省の特定疾患

網膜色素変性、サルコイドーシス、ペーチェット氏病、重症筋無力症、多発性硬化症等と確定診断(*1)された方が認定されます。
(*1:各疾患により要件が異なります)
東京都では、上記疾患の他にシェーグレン症候群、網膜脈絡膜萎縮も対象になります。

2 特定疾患の認定を受ける方は申請の手続きをして下さい。

保健所で「臨床調査個人票」をもらい、病院へ提出してください。(病院の書類作成費用として¥3,150の費用がかかります。)

3 書類が揃ったら、最寄りの保健所へ提出して下さい。

提出書類は、以下の通りです。

- ◎健康保険証のコピー
- ◎住民票
- ◎難病医療費助成申請書兼同意書
- ◎臨床調査個人票

4 認定後、受給者証が交付されます。

5 医療費について

医療機関窓口での自己負担限度額は、所得状況に応じた額になります。

【重症認定の場合】従来通り無料です。

【一般認定の場合】

・所得状況に応じた自己負担限度額(医療機関ごと・1ヶ月ごと)が設定されます。

【医療費の自己負担限度額に関する諸注意】

- ①同一生計内に2人以上の患者様がいらっしゃる場合、2人目以降の生計中心者でない方については、別途規程があります。
- ②「サルコイドーシス」「ペーチェット氏病」「重症筋無力症」については、「軽快者」が設けられます。

『軽快者』とは・・・

医療費の公費負担が対象となった後、治療の結果症状が改善し、経過観察等一定の通院管理の下で、著しい制限を受けることなく就労等を含む日常生活を営むことが出来ると判断された方のことです。一旦、医療費助成は対象外となりますが、症状が悪化した場合には再度助成を受けることができます。



入局医師の紹介

井上眼科病院



田中 あゆみ(たなか あゆみ)医師

千葉県出身です。よりよい医療を実践していけるよう、日々精進してまいります。よろしく願い致します。



新井 歌奈江(あらい かなえ)医師

東京出身です。患者様の立場に立ちながら、真摯に診察に取り組んでいきたいと思っております。不慣れなこともあり、ご迷惑をおかけすることもあるかと思っておりますがどうぞよろしくお願い致します。



岩佐 真弓(いwasaki まゆみ)医師

初期研修医を経てこの春眼科医1年生になりました。今の私には患者様みなさんが先生です。頑張って成長してまいりますのでよろしくお願い致します。

※平成22年4月1日より事務長が深海実(フカウミ ミノル)に交代致しました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

オススメ!

近視矯正手術(LASIK)説明会

LASIKに関心をお持ちの方、実際に検査・診察を受ける前に説明を聞いてみたいと思ひの方は、お気軽にご参加下さい。ご希望の方はお電話でお申し込み下さい。

フリーダイヤル 0120-48-4930

■日時:平成22年7月13・27日/8月3日・17日/9月14日

18:30より1時間程度

■場所:井上眼科病院1階 ■費用:無料



若くあると云うこと

サミエル・ウルマン作の詩に「青春」について書かれたものがあります。「青春とは人生の若い一時をさすものではない。その人の心の中にあるものだ。人は信念を持つことで若くあり、疑念とともに老いる。自信とともに若くあり、恐怖とともに老いる。人は希望がある限り若く、失望とともに老いる。」鳩山内閣が崩壊しました。小沢幹事長も退任しました。何故、こんなにも早くの思いがつのります。次々と目まぐるしく替わる国の代表、総理。他国から見ると日本ほど国の代表、責任者がこころと替わる国はないと半ば呆れられているのではないのでしょうか。これでは日本は世界から信頼される国になることはとうてい無理でしょう。しかし良く考えてみると、その場、その場の世論や風潮に惑わされる我々一般国民の見識の無さを世界に露呈しているだけなのではないかと危惧します。確固

たる信念を持って我々も考え、国の政治も進んで行かなくてはならないと深く感じています。さて、今、医療の場において若くあると云うことはアンチエイジングと云う言葉に代表されているようです。抗加齢医学会が医療の各方面から注目されています。眼科領域ではどうでしょうか。眼の病気の80%は加齢と関係しているといわれています。白内障、緑内障、加齢黄斑変性症、糖尿病網膜症、ドライアイ、結膜弛緩症、枚挙にいとまがありません。高齢者60歳以上では視力の良い人ほど、視力検査をちゃんと受けた人ほど認知症になる確率が低いといわれています。アメリカのような保険制度では視力検査も受けられない高齢者が多く、そういう人の中で認知症が多いといわれています。白内障も全身の加齢との関係が深いようです。老視や白

西葛西・井上眼科病院 院長 宮永 嘉隆

内障はその発症のメカニズムもわかっており、治療も進んできました。私達が病院で患者さんを診ていて、如何に多くの高齢者の方々が来院されているか、そしてその方々に適確な医療を提供できているか、改めて心に問うています。私達は眼を通して心身共に若さが保たれるようにこの信念のもとに日々努力しています。人だけではありません。病院そのものも常に若くありたいと思っています。ハードの面からも常に斬新な設備、装置を備えていると云うことだけでなく、そこで働く医療人が信念を持って、自信を持って働ける病院を目指しています。内閣が替わろうが政権が交代しようが、医療人としての信念を持って励みたいと思ひます。若くあると云うこと、それは努力、努力なしで若さは保てない、そんな思いが心を過ぎるこの頃です。

歴史資料は語る 11 (井上眼科病院「目の歴史資料館」より)

初代院長夫人豊子の内助の功

初代院長の井上達也は、最新の治療・研究と内塾生の育成に没頭し、病院の経営一切を豊子夫人と豊子の父山下願翼に任せていた。病院の会計は豊子夫人が担当し、六男三女の育児と内塾生の世話なども加え、体力・気力とも多大な負担であった。当時の病院では個々の治療費の請求は行わず、受付に救世軍の慈善鍋に似た籠が置かれ、患者は自分で治療費を適宜に計算した上で、懐中に応じて適宜に治療費を投入する習慣になっていた。貧しい患者は野菜などで物納、年二回の盆暮れ払いや大口の寄付などもあり、井上眼科の名声を慕ってくる患者も多く、経営は何とか順調であった。明治28年7月達也は落馬事故で不慮の死を遂げ、後に残された豊子夫人の苦勞は並大抵のものではなかったが、気丈夫に病院経営を引き継ぎ、優秀な門下生や医局員を独仏へ留学させ、次男達二が眼科医として育つまで、井上眼科の名声を保ちながら後継者の育成に努めた。後年、明治45年の全国眼科医の長者番付では第一位にランクされている。



井上豊子夫人

